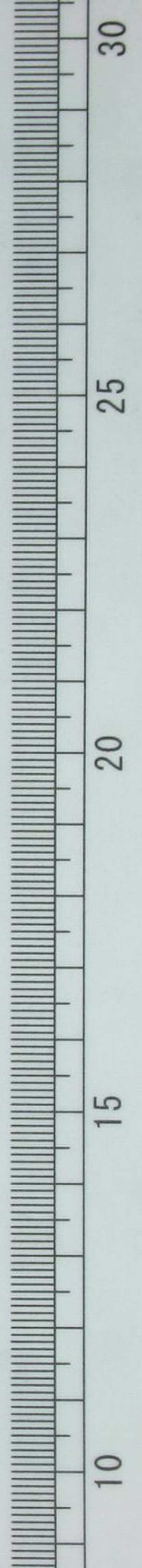




鹿島戦記
永島福太郎録
後編 四号 加賀吉板



永島福太郎様
永島子孟 高重

繪本 鹿兒島嶼戰記

東京 青木堂板

鹿兒島戰記後編四号

永島福太郎錄

時小六月廿四日官軍小ハ

鹿兒島へ連絡と通せんを

午前三時此日ハ珠小兩

りゆ星のくが

さるへさる曇天

昏の暑さ心忘る

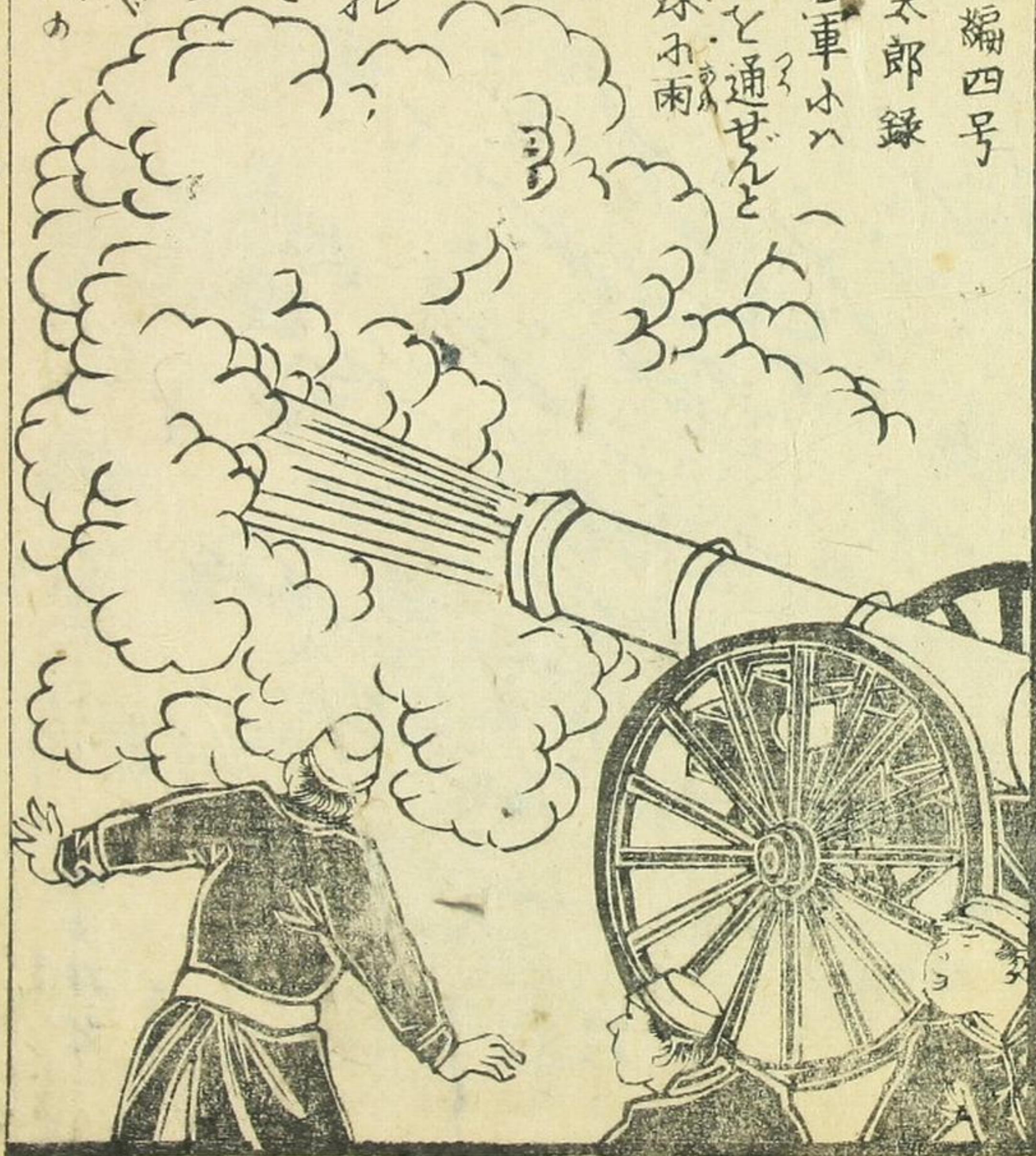
うのたる草のきれ

蒸る如き暑さ

を樹間と通す

山風小漸々去め

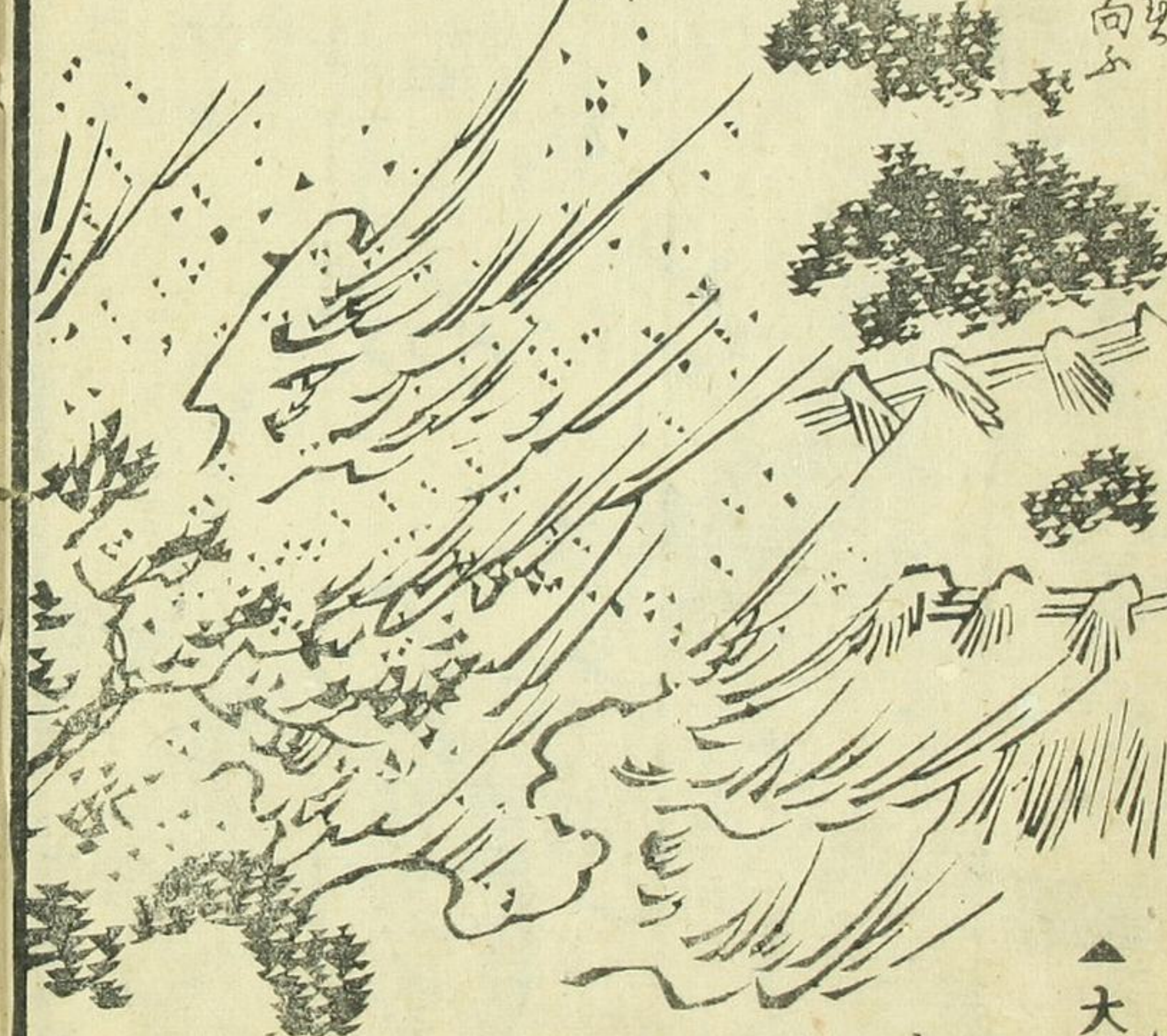
深交小第一墩團カ



鹿兒島戰記後編四号

46-7700

官兵の西田橋の向ふ
小當り宇野本が
岡との小処の後の
山より薩兵が屯
集あせる二本松の
臺場と一挙小
乗やがんと
天隊の精兵烈
よく大小砲と
打うけむると
をり攻めをる
彼方も名をおふ
薩兵の色は



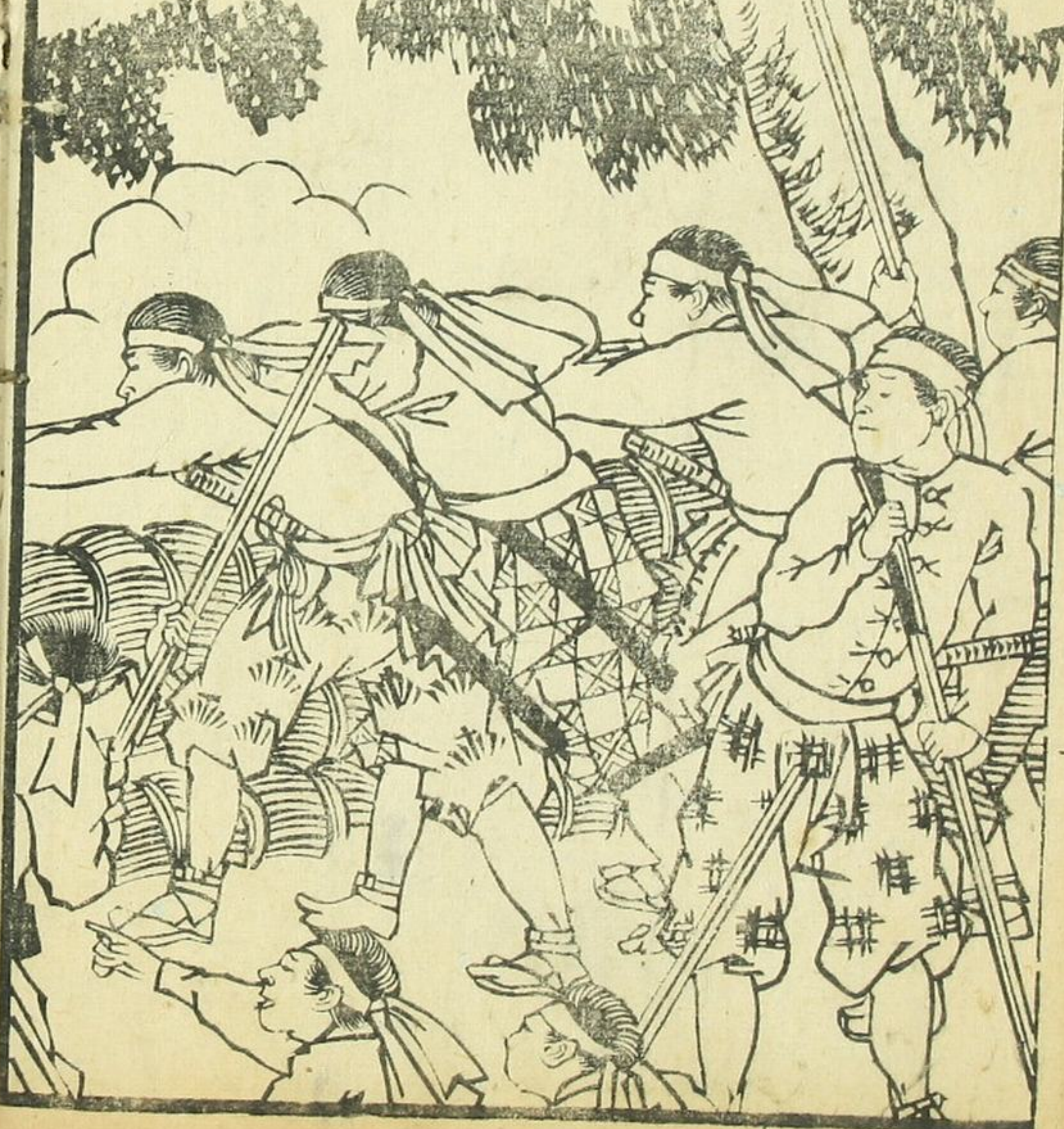
大砲と
そよく
打ひた
官兵の
死傷
最も
多
色
を
し

あかく挑む
たうい官軍の
勢ひ尖く
防ぎうひて
退きまへ
武山の墨小
よりて
固く
守り此山の
鹿兒島城
より程近き処るれ官軍
當國へ進入以來城下並傍小
あやく戦争あるこび賊此所よ

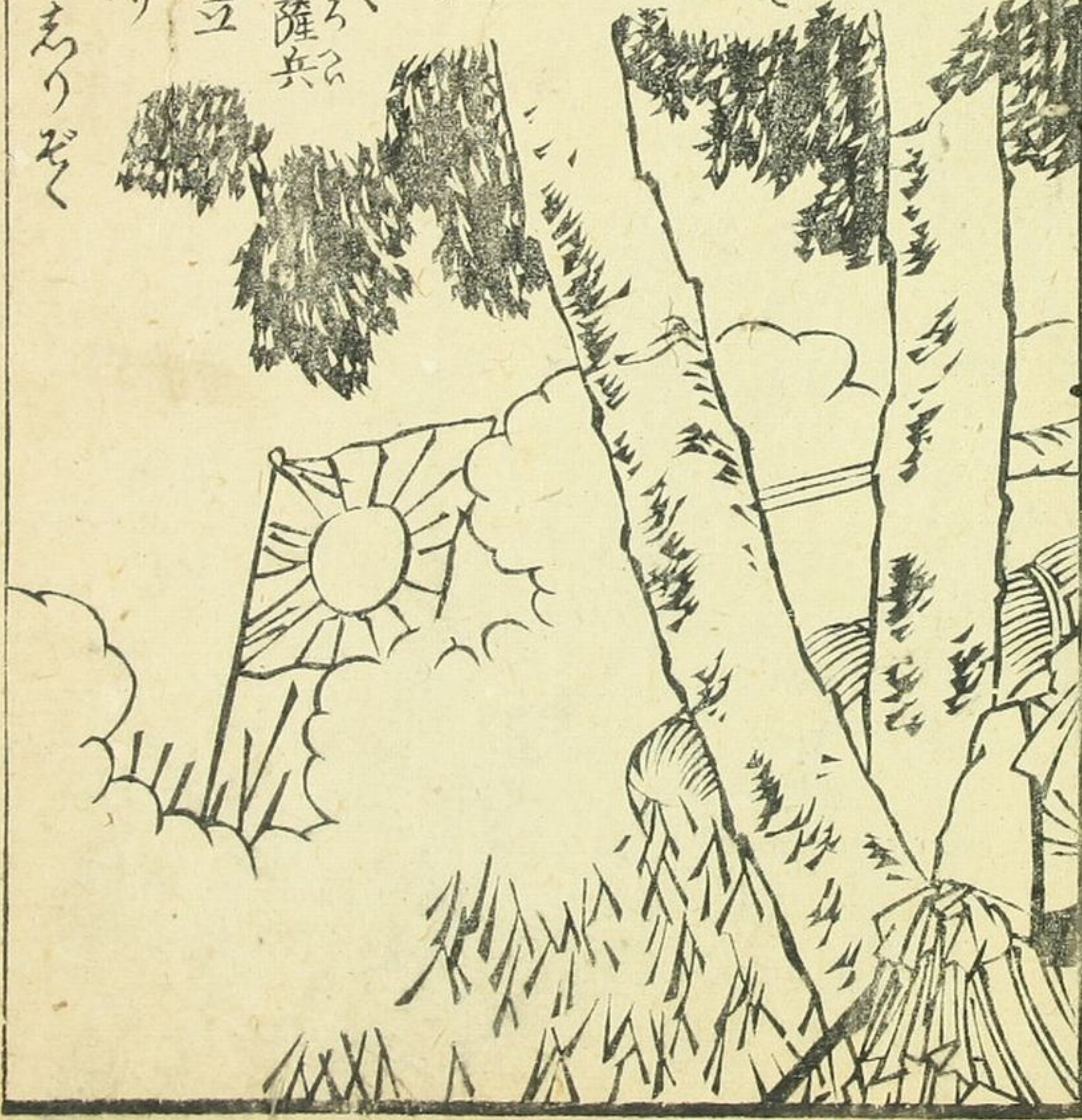


官軍
大
隊
以て
西田
の
色
並
西
の
進
軍

武山の麓なる
 賊の巢窟なる
 民家と目ごみ
 破烈王と打ち
 ける所なり
 東南の風烈
 破烈と共ニ民家
 二時小猛火となり
 火勢盛ん立の
 場をばして引退く
 又別働第三隊團
 無二無三進



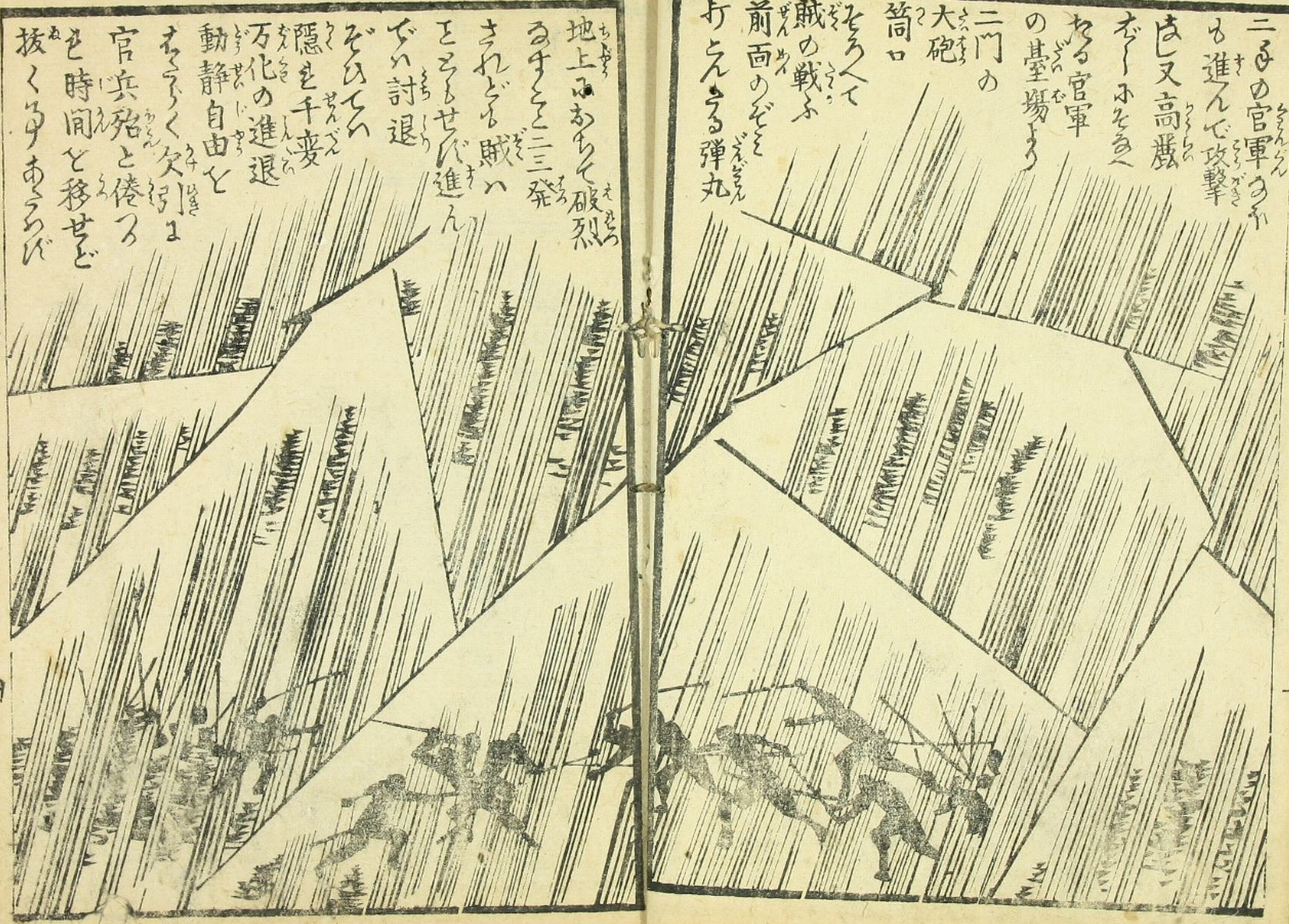
て山上より脊後
 の山よりすく
 鎮台兵と一
 ろうともは
 どの場をか
 一の鎮台二
 隊ハ武山の半腹
 ころ賊壘の右翼
 砲撃するは
 ハ両手の兵
 らは此処
 へ引



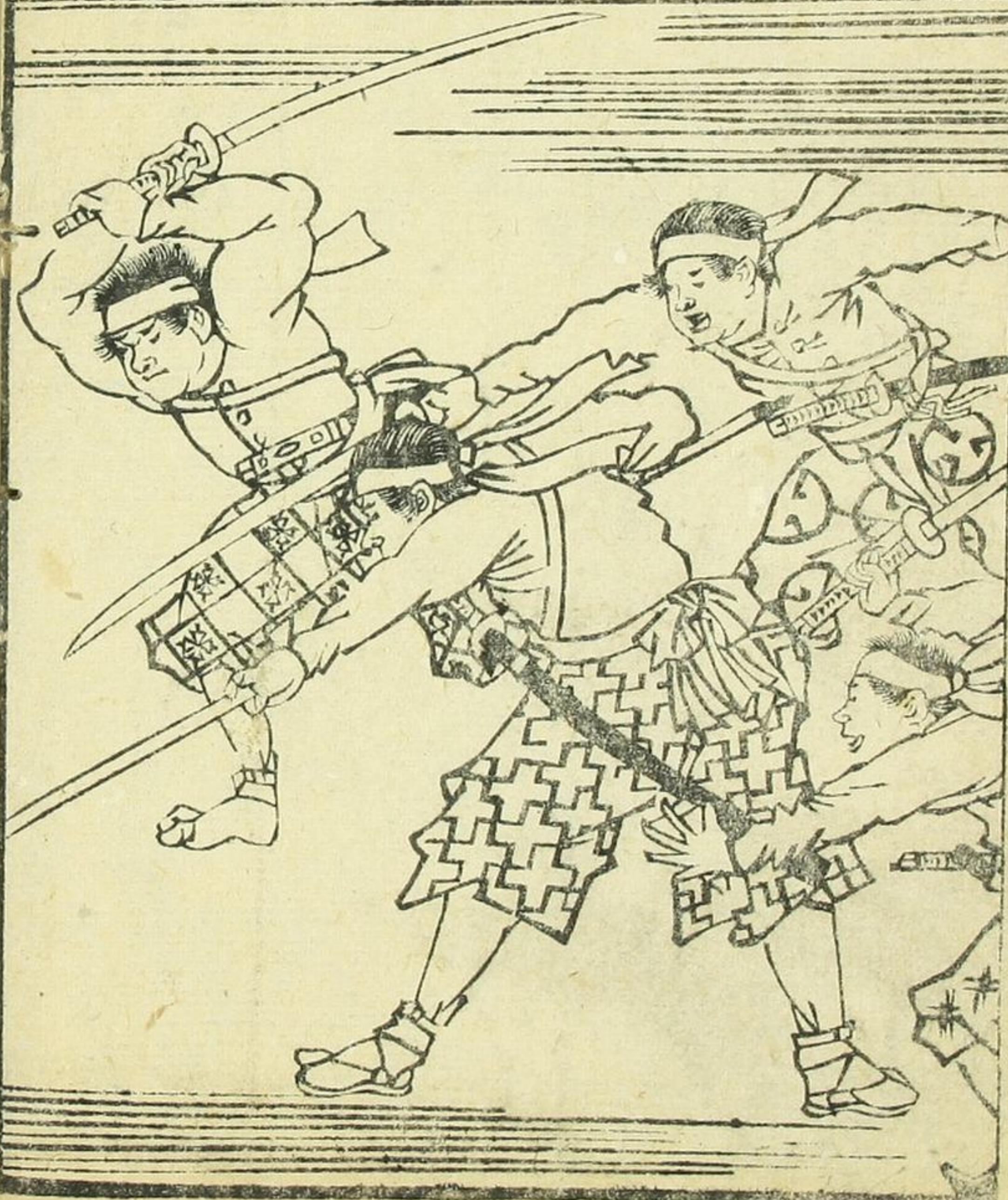
尾上守道行状

二子の官軍の
も進んで攻撃
は又高巖
をくふを
ある官軍
の基場より
二門の
大砲
筒口
をくへて
賊の戦ふ
前面のぞき
打えらる弾丸

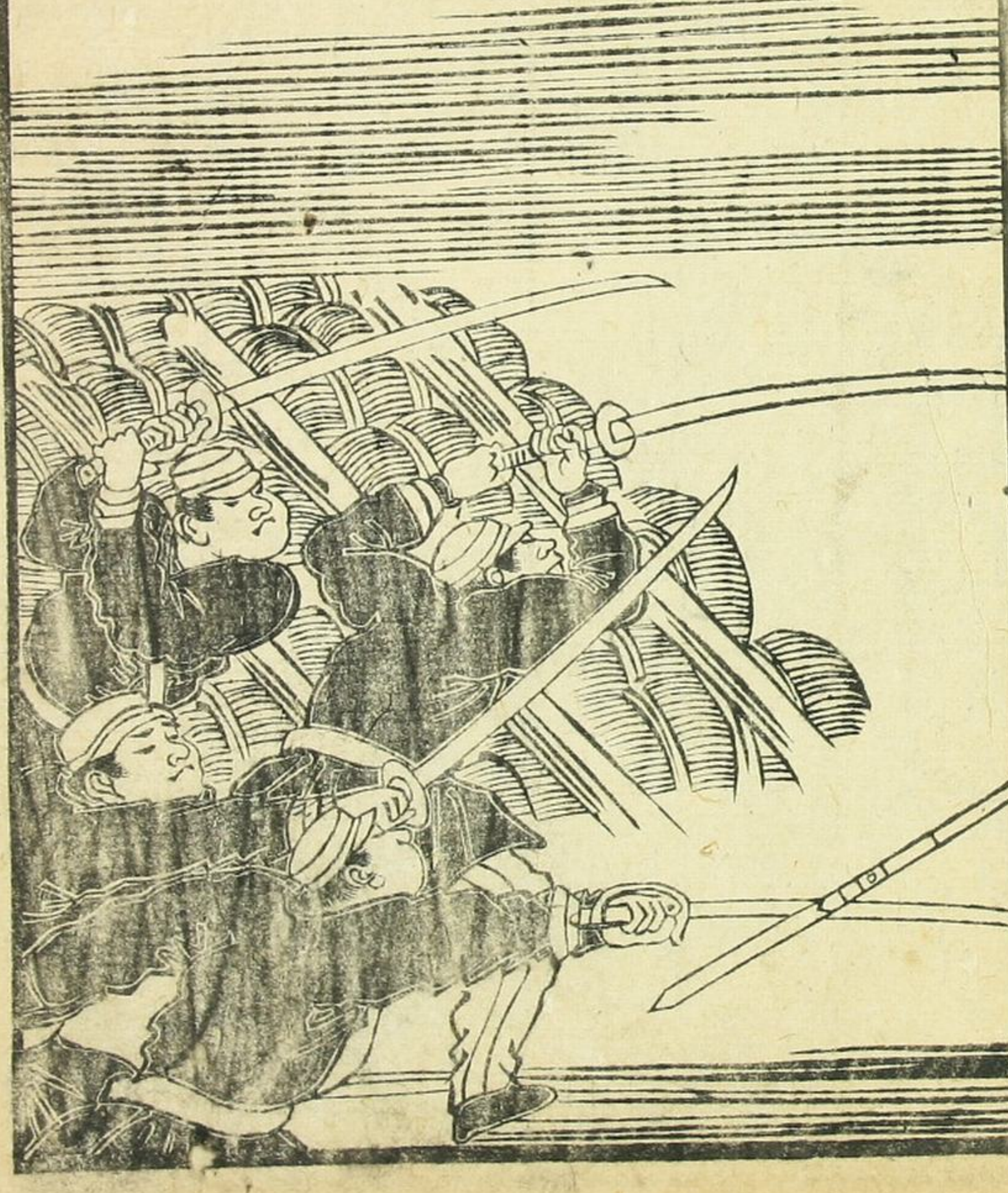
地上はあちこち破烈
るすこと二三発
されども賊ハ
ところせいで進ん
での討退
をひて
隠を千変
万化の進退
動静自由と
なすべく矢引
官兵殆ど倦る
と時間と移せど
抜くるあらび



此時西田
不備へ
大砲
二門を
激しく
連発せり
官兵これ
おびえ
一歩も
お攻戦
午後四時
ごろより



つらりと
降出す雨
忽ち大
雨となり
篠とて
ねてつ
如く雷鳴
をげく
真ま
砲声と
電光ハ
中を貫
飛玉のり





兵の
 大隊 長逸見十郎太の妻へ
 主謀とあり今度戦地あり討死あり
 のの妻女や女子を煽働あり五十余人の

賊兵
 退去
 茲に賊

⊕ 砲声
 のたえ
 間あり
 天明の



恐ろしく
 目も焼鉄
 とさすぞい
 されども両軍
 まじもひるまば追つ返
 しの戦ひが午後六時小
 のり賊兵遂に

▲ 後の谷間へ退きし官軍即時に壘場を奪ひ
 大砲三门分捕あり祝音を発し此日賊の隊
 長前田何某外一名乱軍の内討死あり
 兵士数多倒色あり官軍方もも死傷
 三百名ありとぞ鹿兒島進入
 以来の大激戦ありとぞ同夜再び
 賊兵壘場ふありあせむげ

⊕ たふひ
 明四時
 ごろふ
 あよふ
 まあで

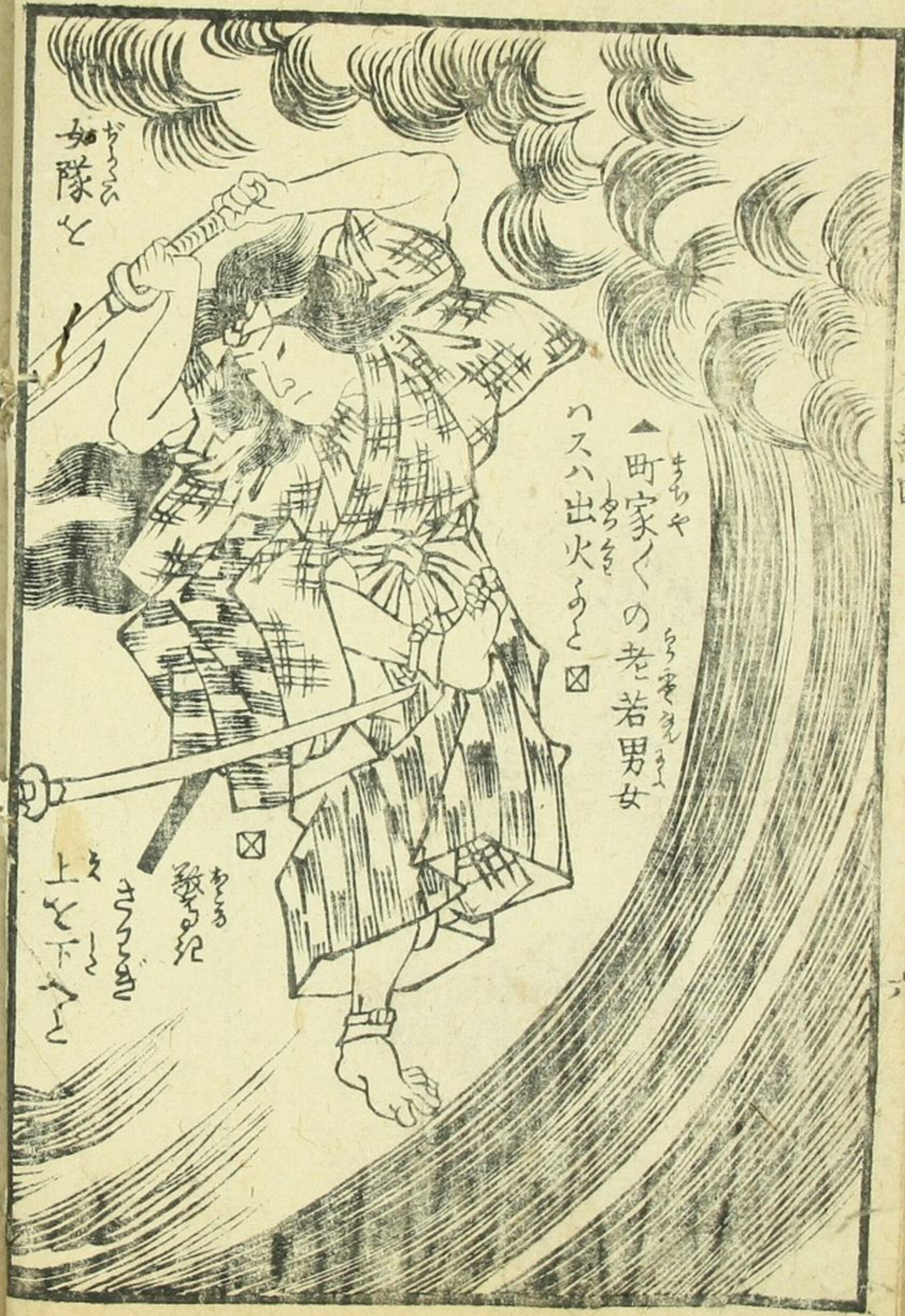


まつた城下の町へ進入
 官軍の此地は足の止
 りぬやうに一挙に追をり
 と膽太らも用意とらぬ
 最風をひいた九日の夜十二時
 とやあしき頃ふもに
 松明とともしつ
 城下の町々呉服町や
 はじめとて諸方故
 火におおびくふ烈風ふ
 つまて炎のあち四方に
 廣う海岸へ延焼し石燈籠
 通りより廣小路まで灰燼とあり

夏見...

ありとあり
 右にたて
 迎を
 一方あり

海軍省
 の内務



如隊と

▲町家くの老若男女
 のスハ出火ふと

上と下と

夏見...

兵小官吏出張しと消防の分力たるより白布をんで鉢巻し
赤き袴と綾どうつ長刀のし女隊の一群此処彼処あまのこつ
消防の妨げさすゆへ消防組も始めのあまの女とあま
どろ追拂んとほこりしはともあがり強気乃女兵ゆへ
各難美ふ及び一が
必死と究めて陣
ゆへ夜明のあまんで鎮
火せしう縦往ふ奔走
せし女隊のあまの何地へ
失えぬふいふるえびありになり
○よそも前号ふ解のせし
熊本城内ふとのり) 巡查何某のころらびも
小勝が容色にぞんのうの心火と燃し迷ふ悪路の武士の



藝妓小勝

思を
仇あ
返すの
なう
又い
とを
軍人
婦女の
色香に
汚名と
取るが

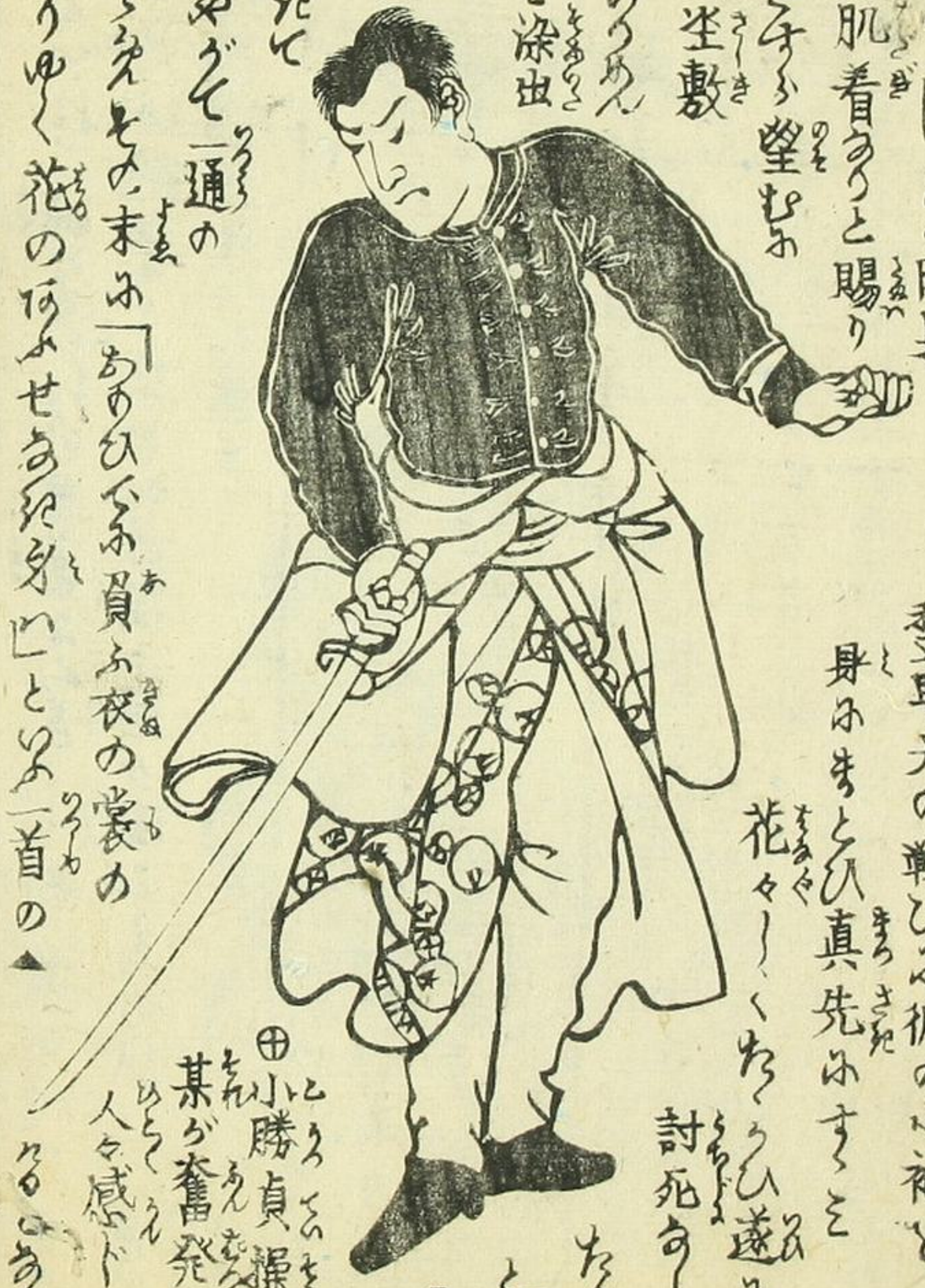
猛き心も我がせし腕をぬけて思案ふらさし愛慕の情の末代
鬼の責らるる色ひ絶る心のやその夜小勝が困ふ志のび
心の夫とく口説はさすう小勝も
藝者のとてさけり辱辱と
与へあが如何あることとあり
ゆへん免やせん角やとあひひ
急度心は思慮とめぐし彼巡
査み答るやう君のあ情のわど
妻が分ふと何程うらまへられど
ろくろ元米竹の細き流さふ沈しぬも故
少将殿の情ゆて以前ゆるる今の身の上あり恩美を
受し君の未ご忌服も過ぬらあつらぬ浮名立もせが
此身へのものつらむとせとさうあひ我君の汚名とあり



顔とあけ
巡査
迷ひの
追が
一言
理と
とらば
恥辱
まの
末代

止るべし下去前世いふ因果縁
 ありや探るも己の因果
 責てへ君の肌着ると賜り
 たりとひさす望む
 小勝へ以前生敷
 着の空色ちるめん
 裾の藻草を染出
 せ花美な
 小袖と与へ
 うへ押して
 詰所へ入りやぐと一通の
 礼状とあるをえとみ末ふ「あのひさふ負ふ夜の裳の
 洋藻とさちりゆく花のほみせある身」といふ一首の

▲哥とこれと小うの許へあり
 翌早天の戦ひは彼の小袖と
 身のみとひ真先ぬすこと
 花々しくちるひ遠み
 討死す
 ちる
 ④
 ④小勝負真操
 某が奮発
 人々感す
 なる



010190508027

